

大和明日香村岡出水出土石造物の顛末

網 干 善 教

奈良県高市郡明日香村岡字出水の地籍で発掘調査を担当する奈良県立橿原考古学研究所は、検出した遺構が飛鳥時代に築造された苑池遺構であると発表し、平成11年6月15日付の新聞はその内容を大々的に報道した。

この遺跡はかつて「出水の酒船石」と称された石造物が出土したところであるが、その石造物が現在、京都市左京区南禅寺下原町37、野村別邸碧雲荘（野村殖産株式会社）が保有し、庭石として転用されていることは周知のことである。そこでこれを機会にその石造物の顛末について整理しておきたい。

まず、平成4年11月1日刊行の野村小枝著『野村得庵と碧雲荘』（野村碧雲会発行）があってそのなかに次のような記述がある。

又織庵露地の降り躊躇の窟として使われている石造物に出合ったときだ。これが飛鳥で出土した酒船石なのである。

とあり、ついで現在、岡字酒船1266番地に所在する史跡酒船石について本居宣長の『菅笠日記』を引用して説明している。そして

ところが、大正5年5月21日、酒船石から西南約400米余の飛鳥川畔の水田から、酒船石と非常によく似た石造物が2個出土した。水田の所有者が水路に石が出ているのを見つけて取り除こうとしたところ、これがずいぶん大きな石で、掘り進むうちに人工の石造物らしいと判った。

半月がかりで掘り出した石の1つは、長さ2.2米、幅1.7米、高さ75厘の扁平な石で、表面に扇状の窪みが2段に彫ってあった。この石には台石がついていたが、それは埋戻したようだ。（中略）

今こうした石造物が掘り出されたら大変な話題になるだろうし、埋蔵文化財として個人の自由にはならないが、当時はそうした点が野放しだった。2個の新酒船石は水田の持主から庭師の手に渡って、碧雲荘へ運び込まれたのだった。大正・昭和初期の実業家たちは、庭園内に古い石造美術品を据えることを好ん

だ。従って庭師たちは、絶えずそうした品の入手に気を配っていた。（そして、神戸市灘区に本邸棲宣荘を新築した際、明治20年代に流出した法隆寺若草伽藍跡の塔心礎が移ってきた時の様子、昭和14年10月末にこの心礎を無償で法隆寺へ返還し、それが法隆寺再建非再建論争に一石を投じた経緯を記している）と述べている。ところがこの庭石について

新酒船石が又織庵の路地の窟に使われているのを見た高橋箒庵は「趣向は左る事ながら当荘の如き規模雄大なる茶席の路地に、斯かる佻奇なる細工が調和すべきや、茶人の批評は如何あろう」と否定的な感想を洩らしている。出土したあとの保管がどのようにされていたかは判らないが、大正12年に据えられた当初はかなり目立って、違和感があつたかもしれない。箒庵も石造物趣味では人後に落ちない人で、こまめに古寺や庭師を廻って目ばしい品を漁っていた。箒庵の口調には、いささかの口惜しさが籠っているかのようなのである。としている。この文を読むと大正12年には出水



京都碧雲荘にある出水出土の石造物

の石造物が碧雲荘の庭園に配されていたことが分かる。ただ大正5年の発掘から12年までの間の様子は分からないが、この記述に間違いがなければ、佐藤小吉編の『飛鳥誌』（昭和19年5月5日、天理時報社発行）に発見の年月が大正15年5月とあるのはミスプリントとなるだろう。なお、昭和3年11月10日の昭和天皇即位の大礼にあたって碧雲荘は久邇宮邦彦王夫妻の宿舎に当てられて、大改修工事を行っている。

つぎに、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館が開催した昭和61年度秋期特別展示の図録『飛鳥の石造物』には、

飛鳥川から張り出した北寄り、出水字ケチングの田圃から、耕作中、大正5年、石塊が現れた。掘出すと2個の花崗岩よりなる、もう一つの酒船石があった。発見地の隣の字アグイで組立てられた写真が残っている。

とある。そこに掲載された2葉の写真は発見直後の大正5年6月に和田千吉編によって刊行された『日本遺跡遺物図譜』第3輯の4枚のうちの2枚である。

また平成2年10月3日～11月23日の間、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館で開催された『日本書紀を掘る』と題する開館15周年記念特別展示の図録に、

1919年（大正7年）（◎1919年は大正8年）飛鳥川の洪水によって、雷丘と甘櫃丘の間にある豊浦の集落は大水の被害をこうむる。この時、上流のミロク石の近く、木葉堰東岸、字ケチングの川岸が洗われ、2個の奇石が出土する。出水の酒船石である。隣の字アグイの田圃で組合わされた後、牛に引かれた石は畝傍駅より、京都東山へ運ばれて行った。偶然出土の時代である。

と記している。ここでは大正7年の水害によってこの石造物が出土したとの見解であるが、明日香村によると、地元で俗に「豊浦流れ」という水害は大正6年8月15日の夜半から翌16日の早朝にかけて起き、家屋18軒が流失したといわれているから石造物はこの水害でなく、前年の大正5年すでに出土していたことになる。

昭和2年12月10日内務省蔵版、『奈良県における指定史蹟第一冊』の報告書には、大正5年5月に偶然発見した。附近には竹片、土器片、木実、萩等も出土したと記している。

さらに、先述の『日本遺跡遺物図譜』の4枚の写真の解説文には次の如き説明がある。

（其一、其二、）此地の所有者西田新太郎氏は、大正5年5月21日右水田の水路に石の一部分を発見し、之を取除かんとして、はからず一種の石造物なるを発見し、続いて之を発掘し、6月5日に至り発掘し終りて、十間計り距りたる飛鳥川の堤防の凹所へ移したり。とある。その場所について、

此石造物の後面に標を付するは発掘場所にして、現在の石のある所より約十間計り東南の田の中に当る。

そして写真について、

写真は森田常次郎氏監督の下に6月11日撮影したるものにして、以上はすべて発掘調査したる同氏に據れり。

とある。森田常次郎氏は橿原市久米町に在住されていた古物商で、戦前かなりの考古資料のコレクションがあった。

次に其三、其四の説明について、

此石に割れ目あるは運搬の際破損せしものなり。森田常次郎氏は原位置に於て試に水を流し見たりしに、甲乙の組合せよろしきため、一滴も外部へ洩れざれしのみならず、上の甲石より乙石へ移りて、長き溝に流れ入りてより、其深きところ一時沈澱し、徐々に下に向て流れるる様は甚巧にして、終りの穴は少しく上向き居り、何物か此先に付着なさしむが如き装置なり。石の傍よりは土器片、直径1寸の竹切れ、木の実、稻のみみ、直径約五寸位の丸木を発見したるも、関係あるや否やは明らかならず。

とする。

以上の諸記録から出水の石造物の検出、京都への搬出の様子の一部をうかがい知ることができが、まだ十分であるとはいえない。

今回の出水の苑池遺構発掘にかかわる報道によると、この苑池が新羅の雁鴨池と関係があるとか、『天武紀』にみえる「白錦後苑」でなかろうかとかの論議はあるが、それは別として、以前この地より出土した石造遺物の顛末について記しておきたい。